

めることに妨げがなかったこと、②活動の初期の段階で管区長館と活動拠点が同じ場所であったため、プロジェクトの立案から実践に至るまでのプロセスに時間を要しなかったこと、③活動を行う修道女が管区の責任者である管区長を含めて少人数であったため、日頃から円滑な意思疎通が図られ、プロジェクト始動後でも柔軟な修正が可能だったこと、④SDSの修道女の多くが看護師資格を有しており医学的な知識・素養があったこと、⑤SDSの施療院と助産院での活動を通じて修道女と村人の間に信頼関係が既に醸成されていたこと。

SDSインド管区によるナットウ・マルンドウのプロジェクトは、カトリック教会の慈善の精神の発露として、地域医療の実践を現地社会の諸事情と修道会側の諸条件が合致する形で実現したもので、宗教組織による福祉事業の成功例と言うことができる。

### 一九二〇—四〇年代「精神療法」のなかの臼井式靈氣療法

平野 直子

本報告では、手当て療法「レイキ」の生まれたコンテキストを、同時代の療法——特に「精神療法」と呼ばれる、一九二〇年代から四〇年代の日本に特有の一群の代替療法——との関係に焦点を当てて描き出すことを目的とする。

レイキは一九八〇年代、ニューエイジ文化の中でヒーリング技法のひとつとして流行し、体験者は世界で百万人を超えるとも言われる。身体に手を当て、そこから「宇宙のエネルギー」を流すことで、心身の健康維持や自己啓発などに効果があると

いわれている。

レイキの世界的な流行は欧米から始まったが、その最初のルーツは一九二二年、東京で臼井甕男によって考案された「靈氣療法」にさかのぼる。臼井は靈氣療法を、断食などの求道と修行の結果得られた「独創」だと語っており、臼井の鞍馬山における「靈氣療法」感得の物語は、実践者たちにとってレイキのリアリティを支える強固な柱の役割を果たす。

しかし、一九二八年に臼井の「靈氣療法」に接した心理学者・小熊虎之助は、『サンデー毎日』に寄せた記事の中で、それを「精神療法」の一種だと見なしている。この場合の「精神療法」とは、吉永進一らの近年の研究（『精神の力——民間精神療法の思想』『人体科学』十六（二）、二〇〇七、九—二一ほか）が明らかにしているように、大正から昭和戦前期にかけて叢生した、健康維持や病氣治療に関する独特の理論や方法である。それらは催眠術、神智学やニューソートといった欧米由来の思想をベースに、東洋の身体技法から当時最新の生理学や心理学までの知識を、多彩な療法家らがそれぞれ独自の治療と健康法の体系に編成したものであった。

当時の新聞記事を見ていくと、医師以外が提供するある程度体系だった治療・健康法で、「心理」「精神」「霊」などを操作する技法を用いるものに対し、「精神療法」という言葉が使われていることが確認できる。しかし、小熊が「靈氣療法」を「精神療法」の一つと見なしたのは、単にそうした外形的な類似点のためだけとは言えないだろう。臼井の「靈氣療法」の論理や用語法、方法などの中核的な部分に、他の「精神療法」と

強く響きあう部分が見つかるからである。

たとえば「靈氣療法」には、「五戒」と呼ばれる日々の心の持ち方を教える詩句が存在する。現在のレイキ実践者にも大切に唱えられているものだが、これに非常によく似た句が、一九一四年に発行された鈴木美山『健全の原理』に収録されている。

『健全の原理』は、鈴木が唱導していた典型的な「精神療法」の一つ、「健全哲学」についての書物で、同書の壮大な「哲学」の体系により精神を正しく保つことで、身体を「人間本来の健全な状態」とするという、メアリー・ベーカー・エディ（クリスチャン・サイエンス）の影響を受けた論理が展開されている。

また、「靈氣療法」が想定している、宇宙に充滿し心身を癒す「エネルギー」という存在は、「精神療法」に広く見られるものである。たとえば高木秀輔が一九二五年に発表した「人体アウラ靈氣術」は、「プラナ」や「アウラ」とも言われる宇宙に満ちる「精気」を補うことで健康を取り戻そうとする療法であった。高木も同書の中で「五戒」と類似する句を使用しており、臼井の「靈氣療法」と何らかの関係があるか、同じ情報源を参照していたことが推察される。

このように、レイキは臼井の「独創」というよりは、同時代の「精神療法」のコンテキストに深く根ざした存在であった。「精神療法」の時代に生まれて現在も実践されている代替療法は他にも多く、今後それらの関係はさらに調査・考察されるべきだろう。

## サイコロジカル・ファーストエイドにおける宗教の役割

井上ウイマラ

災害後の復興段階としては、一、救急救命期（生存の可能性のある人の救命活動が中心となり、最初の七十二時間が鍵となる。軍队的な指揮系統が重要な役割を果たす）、二、被災者支援期（食料、水、医療サービスなどの救援活動が中心となり、社会福祉協議会により避難所やボランティアセンターなどが設立される）、三、生活復興期（瓦礫の片付け、仮設住宅の設営、臨時生活生産設備の設営などが中心となり、宗教色を帯びた支援活動は締め出され始める）、四、生活再建期（日常生活や地域コミュニティの再建が中心となり、心のケアの重要性が増してゆく）に分けられる。こうした諸段階の中で、発災直後に災害現場に入って被災者を支援する人々のために作られたサイコロジカル・ファーストエイド（以下PFAと略称）の存在が注目され始めた。

PFAは、アメリカ国立子どもトラウマティックストレス・ネットワークとアメリカ国立PTSDセンターによって作られ、兵庫県こころのケアセンターが二〇〇六年の改訂版を翻訳してホームページに掲載していた。それが、今回の震災を機に二〇一一年七月に医学書院から『災害時のこころのケア…サイコロジカル・ファーストエイド 実施の手引き』として出版された。

PFAは、災害やテロなどのトラウマ的出来事によって引き起こされる初期の苦痛を軽減し、短期・長期的な適応機能と対処行動を促進することを目的としている。その原理と手法は次